

第八回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

阿部 良雄 著『シャルル・ボードレール^{モデルニテ}【現代性の成立】』

(1995年6月30日 河出書房新社 刊)

阿部 良雄 あべ よしお 昭和7年(1932)生まれ。平成19年(2007)没。
東京都出身。

東京大学文学部卒業。同大学大学院修了。フランス政府給費留学生として、パリ高等師範学校に留学。上智大学文学部教授(受賞時)。著作は、『若いヨーロッパパリ留学記』、『西欧との対話』、『群衆の中の芸術家—ボードレールと十九世紀フランス絵画』、『絵画が偉大であった時代』、『ひとでなしの詩学』、翻訳に『ボードレール全集』(全6巻)、他多数ある。

受賞のこぼ

このたび、和辻哲郎文化賞受賞の栄に浴したことは、姫路中学の先輩として仰ぎ見る存在であった偉大な哲学者の名を冠した賞であるのが、まことに嬉しく感じられます。学術部門の賞は、哲学・倫理学の領域での優れた研究に与えられるものであり、私の著書は文学研究でありますから、正直言って意外の感がなくはありませんでした。しかし、詩人ボードレールが同時代の社会的・文学的な状況の中での選択を通じて自由な芸術的主体としての自己を確立してゆく過程の追跡が、それなりに倫理的な契機の認識を含むものであることを評価していただけたのではないかと、今のところ自分を納得させている次第です。

これを大きな励ましとして、十九世紀、二十世紀の文学・芸術の研究に、今後も出来る限りの仕事をしたいと思っています。

《選考委員評》

勝部 真長

もう六十年の昔にならうか、東京帝国大学仏文科教授辰野隆博士の『ボオドレエル研究序説』というB版の薄い本があって、これが学位論文か、と思われるほど量的には小さかったが、われわれ学生はむさぼり読んだ。本は大きいテーマを小さくまとめるのが良い、と言われるから、量的に大きいばかりが能ではない。しかし今、A5判四百八十四頁の本書を手にすると、わが国のボードレール研究も格段の進歩をしたものだと言わされる。これは著者三十年にわたるライフワークで、副題の「現代性の成立」というテーマに絞って、ひろく文献を渉猟し、考察を深めたもので、ユーゴーが『悪の華』の出現について、「きみは芸術の天に一つの不吉な光を贈った。きみは新しい戦慄を創造した」と絶賛した、その「不吉な光」と「新しい戦慄」の秘密を明らかにした綿密壮大な作業である。

この詩人がカトリシズムにおける霊肉の相克を歌い、不健全な泥沼の生活を送りながら現実を見据え、フランス詩歌の新しい理論・技法を切り開き、象徴派の先駆者となって、ボードレールの存在なくしてヴェルレーヌもランボーもマラルメも考えられぬと称され、高踏派の最高峯に立って新しい時代を開いたところに「現代性」があることが知られる。

『悪の華』が裁判で六篇の詩の削除を命ぜられたが、詩人は『パリの憂鬱』に描いたその時代の退屈・憂鬱に取組み、没個性・不感不動、「狐に胸をかませるスパルタ人」のストア的理想を、ドラクロアの絵画に見出し、ダンディズムを唱えた。触覚・聴覚・視覚・嗅覚がみな応え合うところ、記憶、とくに幼児性の記憶、思い出という流動的暗喩にこそ「現代性」があり、創造の源泉があるという世界を、本書は教えている。但し文章の難解なものには閉口させられるが。

湯浅 泰雄

本賞の学術部門は哲学・倫理学の作品に授賞するとあるが、これは広い意味であって、思想史の分野なども含めている。今回、はじめて文芸畑の阿部氏のこの書を得たのは、和辻先

生のなさったお仕事から考えても適切で、まことに喜ばしい。

本書には「現代性」(モデルニテ)の成立」という副題がついている。日本で「モダン」という言葉が流行し始めたのは一九二〇年頃(大正期)からであるが、ボードレーが活躍した時代はこれより百年近く前で幕末維新のころに当たっている。哲学の分野ではニーチェが少しあとに現われるが、このように早い時代から「現代」の到来を感じとっていたこの詩人の感受性にはおどろかされる。

社会矛盾、人間の醜さ、悪、生の倦怠と不安、官能性、そして旅と自由……といった主題が、象徴表現と言葉のリズムにつつまれて展開する。本書は、その時代背景を詳細に説明しつつ、詩人の生きざまをあますところなく描いている。著者の思い入れが伝わってくる。詩人の感受性の中に視覚・聴覚・嗅覚などが幼児期の記憶と共にはたらいっているという指摘は鋭い。フランス哲学の感性と通じるようである。

『悪の華』が検閲で取締られた話はよく知られているが、それにもかかわらず、詩人の言葉にはどこかカトリシズムとの「反対の一致」ともいえるようなひびきを感じられる。本書は決してよみ易い本ではないが、読者は著者の洞察にみちびかれて、魂の芸術というものについて深い感銘を得ることであろう。

坂部 恵

「Philosophie (哲学) は非常に多くのことを約束しているが、自分は結局そこからあまり得るところがなかった。Philologie (文学) は何も約束しないが、今となってみれば自分は実に多くのものをそこから学ぶことができた。」この晩年のケーブルの述懐を、和辻哲郎は好んで引いた。

時代の生活の形が流動化する時、それまで支配的であった哲学の概念とその構築物もまた流動化し、生きるよすがとしての意味を失う。ひろく過去の言語作品・文献にあらためて生きることの意味を探るフィロロジ(文献学)が、おのずから重要な意味を帯びるゆえんである。

和辻は、適切にも、フィロロジを〈文学〉と、リテラチャーを〈文芸〉と訳すことを提唱したが、阿部良雄氏の今回の受賞作は、この用法に則していえば、〈文学〉と〈文芸〉に渉る作品である。

フランスには、客観的で緻密な文献研究の極みにある精神性を輝き出させる、特有のすぐれた〈文学〉の伝統があるが、氏のボードレー研究は、この良き伝統に即しつつ、〈モデルニテ〉の在りかを見事に照らしだすことに成功している。

個人的集団的な生活の内面のリズムの流動化と深くかかわる韻文詩と散文詩の位置関係の問題、リズムの喪失を他面で補償するアレゴリーの位置、時代への絶望と人類終末のヴィジョン、その只中で生きられる快と苦痛のデカダンスとダンディズム。そのいずれをとっても、十九世紀末から二十世紀の心あるひとびとの生き方、考え方に深く響き合うものばかりである。ある時期以後和辻が意識的に捨てたように見えるニーチェ流のダンディズムの行く末についても、本書はあらためて鋭い問いを投げかけるだろう。